〈研究論文〉

日中における小学校第１学年の道徳資料に関する比較検討

――儒教思想の「礼」を手がかりにして――

那　　楽

〈研究論文〉

日中における小学校第１学年の道徳資料に関する比較検討

――儒教思想の「礼」を手がかりにして――

那　　楽

はじめに

本研究は，日本と中国における道徳授業の特質を比較という方法を用いて解明する研究の一環として，両国の道徳資料を考察するものである。ただし，本稿では，その研究の第一歩として，特に小学校第１学年の段階を中心にしながら，儒教思想の中でも「礼」の視点から比較検討する。なお，本稿では，「礼」という言葉は，日中両国における多様な定義を勘案して，「社会生活をする上で，円滑な人間関係や秩序を維持するために必要な倫理的規範であり，自他相応の尊重の気持ちだけではなく，言葉や行動様式全般を包括するもの」という意味で使用する[1]。

文部科学省の2012年度道徳教育実施状況調査結果によれば，小学校の道徳の時間で使用する教材の割合（複数回答可）は，「国で開発･刊行した読み物資料」34.8%，「民間の教材会社によって開発･刊行された読み物資料」86.3%，「都道府県や市町村教育委員会において開発･刊行した読み物資料」62.7%，「自作（学校作成を含む）の読み物資料」34.4%，「民間の道徳教育研究団体で開発･刊行した読み物資料」20.9%であるという[2]。それに対して，中国では道徳が教科として位置づけられていることもあって，教師は必ず教科書を利用して授業を行うことになっている[3]。したがって，両国において道徳資料は，道徳の授業を行うために欠くことのできない重要な手段になっていると言える。

日中における道徳教育に関する先行研究については，その成果は枚挙に暇がないくらい両国に存在しているが，道徳資料それ自体を対象とし，俯瞰的な視座から詳細に探究したものは多くない。中国においては，王凌浩と桂勤などをはじめ，数多くの研究者が自国の道徳資料の変遷を考察している[4]。そして，曹能秀と饒从満などの研究者は，副読本を中心にして，日本における道徳資料について検討している[5]。また，日本においても，自国の道徳資料に関する研究は数多く存在するが，他国である中国に関する研究は決して多くない。しかも，これらの先行研究の多くは，おおむね日中両国における道徳教育の内容や資料などの特徴について，一国に特化して考察したものになっており，異国間の学術的な比較研究は稀である。しかし，「比較こそが学問と教養の生命ではないか。言語，道徳，宗教，礼儀作法の研究について『一つしか知らぬものは，一つも知らぬ』」[6]という新渡戸稲造の言を待つまでなく，自国を他国との関係で相対化する視点は重要である。

そうした研究については，中国において王麗栄がすぐれた成果を発表している。その研究は，道徳授業の目標や内容などの視点から，日中における道徳授業の歴史を比較検討し，両国の道徳授業の変革の特徴を明らかにした[7]。しかし，王は，日中の道徳教育の理念や政策の変遷について比較するものの，実際的な道徳授業，特に道徳資料については詳細に論述していない。それゆえ，彼女の研究は次の二点において不十分である。一つは，その研究では異国間の比較が行われているものの，主として中国を客観的な研究対象とすることなく，日中両国の比較を通

筑波大学大学院　人間総合科学研究科
学校教育学専攻

して，両国の長所を見出し，日本のそれを中国に無批判に取り入れようとしている点である。もう一つは，道徳の授業を研究対象としながら，具体的な道徳資料のレベルまで踏み込んで検討し，それを文化との関わりの中で詳細に考察した研究は見られないという点である。

このような先行研究の限界を踏まえ，筆者は，中国の道徳資料を相対化して捉えるために，日中の道徳資料を俯瞰的視点から考察する。その際に，両国の文化の基層に流れる儒教思想を手がかりにしながら，道徳資料を主眼に置いて検討する。なお，今回の研究は，儒教思想の中でも「礼」の視点から，日中における小学校第１学年の道徳教育，特にその道徳資料を中心に扱うこととする[8]。

この課題に応えるために，まず，日中両国における道徳教育の目標を確認する。そこでは，道徳資料を支える理論的基底を，特に「礼」とのかかわりの中で，その成立事情とともに明らかにする。次に，「礼」の視点から，両国における小学校第１学年の道徳教育の内容，そして道徳資料の具体的な内容をそれぞれ詳細に分析する。最後に，以上の論究を踏まえ，日中両国の道徳資料全体の特質を比較検討する。

１．道徳資料の理論的基底としての目標における「礼」

日本の場合，道徳資料は，『小学校学習指導要領』に記された道徳教育の目標を拠り所として作成されている。したがって，そこで記された道徳教育の目標は，道徳資料の理論的基底になっている。『小学校学習指導要領』の第１章総則において，日本の道徳教育の目標は，「･･･人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭，学校，その他社会における具体的な生活の中に生かし，豊かな心をもち，伝統と文化を尊重し，…（中略）…その基盤としての道徳性を養うことを目標とする」と示されている[9]。

それを受けて，『小学校学習指導要領』の第３章の「道徳」では，道徳教育の目標は，「第１章総則の第１の２に示すところにより，学校の教育活動全体を通じて，道徳的な心情，判断力，実践意欲と態度などの道徳性を養うこととする」と確認した上で，道徳授業の目標は，「･･･各教科，外国語活動，総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら，計画的，発展的な指導によってこれを補充，深化，統合し，道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め，道徳的実践力を育成するものとする」と記されている[10]。

この記述を見る限り，「礼」に関する内容は，「礼」という漢字が使用されていないところに顕著に表れているように，直接的に示されていない。ただし，次の二つの表現には，間接的には「礼」につながる内容は垣間見られる。つまり，「人間尊重の精神」と「伝統と文化を尊重し」の箇所である。

前者の「人間尊重の精神」について言えば，『小学校学習指導要領解説道徳編』にも記されるように，それは，「生命の尊重，人格の尊重，人権の尊重，人間愛などの根底を貫く精神」である。特に民主的な社会においては，人格の尊重は，「自己の人格のみではなく，他の人々の人格をも尊重すること」であり，人権の尊重は，「自他の権利の主張を認めるともに，権利の尊重を自己に課するという意味で，互いに義務と責任を果たすこと」を求めるものである。しかも，これらの理念は，「相互に人間を尊重し信頼し合う人間愛の精神によって支えられる」ために，「礼」という「社会生活をする上で，円滑な人間関係や秩序を維持するために必要な倫理的規範」につながるものである[11]。

また，後者の「伝統と文化を尊重し」について言えば，「伝統と文化」の意味内容は，もちろん日本のものを指している。その場合，「伝統と文化」の中には，日本の歴史上のさまざまな文化内容，たとえば武士道や芸道などが含まれるわけであるから，少なからず儒教の「礼」の思想が深く浸透しており，「礼」を理解するという目標が，必然的に出現することになる。その意味で，あくまでも「伝統と文化」にかかわって，内容的に探れば「礼」につながる要素が見られる。

それに対して中国では，国際競争が激しくな

る中で，道徳と公民の素養に関する教育の充実が強く求められ，道徳教育が教育の根本として，人格形成にあるととらえられた。また，中国の教育部は「中華人民共和国義務教育法」と「基礎教育のカリキュラム改革の綱要（試行）」の要請を受けて，義務教育（小学校，中学校）における課程基準を定めた。この課程基準の中で，小学校の道徳授業の目標が示された。そこでは，総目標について，「児童のよい道徳性と習慣を養成させ，生活に情熱を持つように導く」と記されたうえで，日本では明確に見られないが，中国では，表１のような４つの区分にしたがって，具体目標が掲げられた[12]。

このように，中国における道徳教育の目標は，「感情と態度」，「行為と習慣」，「能力と知識」，「プロセスと方法」という四つの目標に区分されたうえで，「礼」に関する内容が明確に示されている。たとえば，「行為と習慣」を身につけるように，「礼儀を正しくして，規則を守る」ということが重視されている。つまり，「礼」の思想が，「礼儀」という言葉を通して直接的に明示されている。また，「感情と態度」を身につけさせよとする「年配の方を尊敬して，集団を愛して，故郷に愛着をもつ」という具体目標の記述がなされているが，「年配の方を尊敬して」という表現は，基本的な人間関係を規律する五つの徳目のうちの「長幼の序」を示しており，実質的に「礼」の一部を指していると考えられる[13]。したがって，中国において「礼」という思想は，道徳教育の目標の中に明に暗に示されていると言えよう。

以上のことから，日中両国における道徳資料の理論的基底としての道徳教育の目標を「礼」の視点から比較すると，次のように整理することができる。すなわち，日本の場合，道徳教育の目標は「道徳性を養う」，道徳授業の目標は「道徳的実践力を育成する」というように，最終的な目標は示されており，その記述過程において，道徳教育の目標としては「豊かな心をもち」「個性豊かな文化の創造を図る」「公共の精神を尊び」道徳授業の目標としては「補充，深化，統合し」「道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め」など，長い文章の中で語られている。つまり，全般的に具体的な目標は提示されていないこともあって，「礼」という思想は間接的には反映されていても，直接的には明確に提示されていない。

それに対して，中国の場合，抽象的な総目標

表１　中国における道徳教育目標

感情と態度	年配の方を尊敬して、集団を愛して、故郷に愛着をもつ。
	命を大切にして、科学を信じて、自然に情熱を持つ。
	勤勉で誠実な人になる。
行為と習慣	初歩的な生活と勉強に励む習慣を養成する。
	礼儀を正しくして、規則を守る。
	環境に優しくして、資源を惜しむ。
	積極的にいろいろな活動に参加する。
能力と知識	生活上の基本能力と常識を身につける。
	簡単な国の常識を勉強する。
プロセスと方法	体験して、問題の根源を探る。
	さまざまな方法で勉強する。

が示された後で，具体目標が記されており，そこには「礼」の思想は，「礼儀を正しくして，規則を守る」という表現で，「規則を守る」とかかわらせながら「礼儀」を説くというかたちで明確に示されているだけではなく，「長幼の序」を大切にするという考えに則って，「年配の方を尊敬」するという表現で，「礼」の思想が具体的に暗示されている。

2．道徳資料の基軸としての内容における「礼」

日本における道徳授業の内容は，小学校低学年，小学校中学年，小学校高学年，中学校という発達段階に分けられたうえで，それぞれについて，「主として自分自身に関すること」（以下，「自分自身」と略す）「主として他の人とのかかわりに関すること」（以下，「他の人」と略す）「主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」（以下，「自然や崇高」と略す），「主として集団や社会とのかかわりに関すること」（以下，「集団や社会」と略す）という4つの視点から区分され，それぞれの区分のなかに複数の道徳的価値（徳目）が組み入れられている[14]。そこでは，道徳教育の内容の区分は，目標のところで示された中身とはあまり直接的に関係のあるかたちで登場している。つまり，その内容の区分は，目標を達成するための方略上から直接的に見出されたものではなく，内容の自体をわかりやすく提示するという意図から整理したものであると言える。

そこでの第1学年（実際には，第1学年と第2学年は共通）の内容を見ると，「自分自身」には4事項の内容項目が，「他の人」にも4事項の内容項目が，「自然や崇高」には3事項の内容項目が，「集団や社会」には5事項の内容項目が組み入れられている。つまり，16事項の内容項目が，道徳資料の基軸として組み入れられている。その中で，「礼」に関連する内容としては，「他の人」におけるすべて，すなわち4事項の内容項目（礼儀，思いやり・親切，信頼・友情，尊敬・感謝）が，「集団や社会」における2事項の内容項目（家族愛，愛校心）があげられる。これらの6事項の内容項目を整理すれば，表2のとおりであり，まず量的に言えば，「礼」に関連する内容項目は，16事項中の6事項，つまり37.5%である。

表2　日本の内容項目

	内容項目	
他の人	気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。	礼儀
	幼い人や高齢者など身近いる人に温かい心で接し、親切にする。	思いやり・親切
	友達と仲良くし、助け合う。	信頼・友情
	日ごろ世話になっている人々に感謝する。	尊敬・感謝
集団や社会	父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。	家族愛
	先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする。	愛校心

次に内容的には，『小学校学習指導要領』の内容項目（道徳的価値）を整理すれば，表２のようになる。すなわち，端的に表現すれば，「他の人」では，「礼儀」とともに，「思いやり・親切」「尊敬・感謝」「信頼・友情」があげられているが，これらは，「社会生活をする上で，円滑な人間関係や秩序を維持するために必要な倫理的規範であり，自他相応の尊重の気持ちだけではなく，言葉や行動様式全般を包括するもの」という「礼」に包括できる。また，「集団・社会」における「家族愛」や「愛校心」の内容も，上述したものと同様に，「礼」に包括できるものである。

それに対して，中国における道徳教育の内容は，「小学校課程標準」によれば，小学校と中学校のそれぞれについて「健康・安全な生活」（以下，「健康・安全」と略す），「愉快・積極的な生活」（以下，「愉快・積極」と略す），「責任感があり，愛を持つ生活」（以下，「責任感・愛」と略す），「頭を動かし，創意のある生活」（以下，「創意」と略す）というように，望ましい生活の在り方を４つに区分としたうえで，具体的な道徳の内容項目（道徳的価値）が組み込まれている[15]。すなわち，小学校第１学年に関しては，「健康・安全」に「よりよい生活上の習慣と働く習慣の養成」「身を守るための基本的な能力がある」「学校生活に慣れ，楽しむことができる」という３事項の内容項目が，「愉快・積極」には「楽しい，明るい」「積極的」「明るく前向きに」という３事項の内容項目が，「責任感・愛」には「誠実友愛」「社会規範を守る」「集団・故郷・国を大切にする」という３事項の内容項目が，「創意」には「創造的な夢と楽しみがある」「手，頭を使い，知識を獲得し，経験を積み重ねる」「探求の意識を持ち，探求の方法を学ぶ」という３事項の内容項目が組み込まれている。つまり，そこには，12事項の内容項目が，道徳資料の基軸として組み入れられていることになる。

さらに，それらの12事項の内容項目において，詳細な下位的な内容項目が組み込まれ，合計で26事項となっている。その中から，「礼」に関する内容項目としては，広義に考えるならば，表３のようにあげることができよう。

表３によると，「礼」を広義に解釈すれば，「健康・安全 」の区分の中で，「身を守るための

表３　中国の内容項目

区　分	内容項目	下位的な内容項目
「健康・安全」	身を守る	交通記号を知り、交通ルールを守り、安全に注意する。
「愉快・積極」	楽しい・明るい	友達、先生との付き合いを好み、楽しんで学び、遊ぶ。
「責任感・愛」	誠実友愛	自分のかたちで親孝行し、積極的に家事を分担する。他人を助かたり、特に年配の人や体の不自由な人を助ける、植物や動物にやさしくする。
		クラスメンバーの一員として、グループに関することはきちんとして、クラスの栄誉に関心を持ち、友達にやさしくしてあげる。
	社会規範を守る	礼儀正しく、規則を守る。
		ルールや規則の役割を知り、学校のルールを守る。
		公的な物や他人の物に優しく対応し、水や電気、紙等の資源を大切にする。

基本的な能力がある」という内容項目は，下位的な内容項目から公共的なマナーを意味していることを勘案すると，「社会生活をする上で，円滑な人間関係や秩序を維持するために必要な倫理的規範であり」と見なされ，「礼」の内容に包含されよう。また，「愉快·積極」の区分の中で，「楽しい，明るい」という内容項目は，その下位的な内容項目である「友達，先生との付き合いが好き，楽しんで学び，遊ぶ」を勘案すると，「相応尊重の気持ち，言葉や行動様式全般を包括する」と見なされ，「礼」の内容に包含されよう。「責任感·愛」の区分の中で，「誠実友愛」と「社会規範を守る」という内容項目は，それぞれ3事項と2事項の下位目標を踏まえるならば，「礼」の内容として見なせる。特に，「社会規範を守る」という内容項目の下位的な内容項目の1事項として，「礼儀正しく，規則を守る」という内容は，「規則を守る」とかかわらせながら「礼儀」が説かれている。

なお，数量的に言えば，12事項の内容項目のうち，4事項が「礼」に関連しているわけであるから，33.3%となる。また，下位的な内容項目を見れば，26事項のうち，7事項の内容項目が「礼」に関連しており，全体の26.9%となる。

以上のことから，日中両国における道徳資料の基軸としての道徳の内容項目に関して比較すると，「礼」の項目数の割合については，中国の方が日本より少しだけ低いが，「礼」の内容については，より多様なものになっている。

3．道徳資料における「礼」

日本の場合，道徳資料とは，広義には「学校において道徳に関する指導を行うときに用いられる教材一般を指す用語」であり，狭義には「特に道徳授業において用いられる資料」を指すことになっている[16]。特に，読み物資料は，教師にとって道徳教育を行うための主要な資料であり，そこには昔話，寓話，伝記，日記，新聞記事などのような広範囲なものが含まれる。以下では，道徳資料の中でも，煩雑さを避ける意味で，読み物資料に限定しながら考察する。その中でも，全国的に広く使われている教科書のうち，五社（教育出版，東京書籍，学校図書，日本標準，光村図書）のものを選択して分析する。各社の小学校第1学年の道徳副読本について，「礼」の内容にかかわる資料を抽出して，内容項目とのかかわりにおいて整理すると，表4のようになる。

表4に示すように，道徳資料において「礼儀」，「思いやり·親切」，「信頼·友情」，「尊敬·感謝」，「家族愛」，「愛校心」という項目は「礼」の内容に包含されている。なお，数量的に言えば，五つの出版社の副読本総資料に占める「礼」に関する資料の割合を確認したところ，平均で約40.6%となる。「礼儀」，「思いやり·親切」，「信頼·友情」，「尊敬·感謝」，「家族愛」，「愛校心」など1項目あたりの占める割合は平均でそれぞれ6.6%，6.8%，6.8%，2.9%，3.8%，3.8%である。

『小学校学習指導要領解説道徳編』に示されるように，小学校第1学年の道徳における「礼」

表4　日本の道徳資料における「礼」に関する資料

出版社	総資料数	礼儀	思いやり親切	信頼友情	尊敬感謝	家族愛	愛校心	合計	割合
A社	34	2	3	3	2	2	2	14	41.2%
B社	34	2	3	2	2	1	2	12	35.2%
C社	32	2	2	2	2	3	3	14	43.8%
D社	30	2	2	2	3	2	2	13	43.3%
E社	37	2	2	3	2	2	2	13	35.1%
平均数	33.4	2	2.4	2.4	2.2	2	2.2	13.2	40.6%

については「礼儀」を学ぶのみならず，動作などの具体的な指導や礼儀の形にこめられた相手を尊重する気持ちを考えさせることなどを通して，自然な言動として相手の立場に立って心のこもった接し方ができるような指導が求められている。

日本における道徳資料を見ると，「礼」に関する資料は「礼儀」，「思いやり・親切」，「信頼・友情」，「尊敬・感謝」，「家族愛」，「愛校心」の六つに区分されている。このうち，「礼儀」以外の資料に関しても「具体的な動作」や「礼儀の形」が組み込まれている。すなわち，「思いやり・親切」とは，相手の立場を推し量り，自分の気持ちを相手に向けることである。よい人間関係を築くために，相手に対する思いやりが不可欠である。特に，小学校第１学年においては，身近にいる人，特に幼い人や高齢者と接するとき，相手のことを考え，温かい心で対し，親切にすることが大切である。「信頼・友情」とは，友達との間において基本とすべき精神である。小学校第１学年においては，幼児期の自己中心性がまだ残っており，友達とよい関係を築くことは難しいと考えられる。すなわち，道徳資料において礼儀の形にこめられた相手の立場に立って心のこもった接し方を通して友達と仲よく遊んだり，協力したり，信頼感や友情をより強く感じたりするようになる。「尊敬・感謝」とは身近で日ごろ世話になっている人々の存在に気づき，それらの人々の善意をありがたく思う気持ちである。特に，家族や先生に対する敬愛の心をもち，自分を支え励ましてくれる様々な人々へ目を向け，感謝と敬愛の念を深めていくことが必要である。それは，広く捉えると，生命尊重や人間尊重の精神を支えることになる。小学校第１学年の段階で，「尊敬・感謝」という気持ちを表すことは，具体的なあいさつを学ぶとともに，「家族愛」と「愛校心」における「礼」に関する動作の指導も重視されている。

それに対して，中国では道徳が教科として位置づけられているために，中国における道徳授業で使われている読み物資料は当然のことながら「教科書」と呼ばれる。各教科の教科書については，複数の会社が出版している。その中でも，全国的に広く使われている五つの出版社（人民教育出版社，北京師範大学出版社，長春教育出版社，東北師範大学出版社，蘇州教育出版社）の教科書を手がかりにして分析する。各社の小学校第１学年の教科書について，「礼」の内容にかかわる資料を抽出して，前記の４事項の道徳項目（身を守る，楽しい・明るい，誠実・友愛，社会規範を守る）に応じて分類すると，表５のように示されている。

表５によると，中国における小学校第1学年用の総資料うち，全体の40.4％の資料が「礼」に関連している。したがって，量的には，日中両国の差はあまり見られない。ところが，質的に日中両国の資料を比較してみると，そこには大きな差異が存在している。その点について詳細に検討して提示すべきであるが，本稿の紙幅の関係で，それぞれ「礼」に関するすべての資料を詳細的に比較することは不可能である。したがって，「礼儀」の資料を国ごとに一つの事例を抽出して，それについて簡潔に考察する。

表５　中国の教科書における「礼」に関する資料

出版社	総資料数	身を守る	楽しい明るい	誠実友愛	社会規範を守る	「礼」に関する総資料数	割合
A社	22	3	3	2	2	10	45.5%
B社	26	3	2	3	3	11	42.3%
C社	25	2	1	2	3	8	32.0%
D社	28	3	3	3	3	12	42.9%
E社	25	3	3	2	2	10	40.0%
平均数	25.2	2.8	2.4	2.4	2.6	12.2	40.4%

図１　道徳資料「礼儀をきちんとする」

日本の場合は，Ｃ社１年生の「ちょっとちがうな」という資料を取りあげる。そこではピョンきちとピョン子が主人公である。ピョンきちは給食を食べたあと，食器を返しに行ったが，早く遊びたい気持ちが強く，食器を置くと「ごちそうさま」といって，さっさと帰ろうとした。それに対して，ピョン子は給食を作ってくださった宇佐山さんに丁寧に礼をしながら，「ごちそうさまでした，おいしかったです」と言っている。ピョンきちは「ぼくとちょっとちがうな」と思って，もう一度お礼を言い直している。このようなストーリーの後で，資料末には，「１．ピョンきちは，じぶんとピョン子のどこがちがうとおもったでしょう」「２．みなさんは，あいさつをして，きもちよかったことがありますか」，という二つの設問が記されている。つまり，あいさつをしたときの主人公の気持ちや心情を探る中心質問が用意されている[17]。

それに対して，中国におけるＡ社１年用の「礼儀をきちんとする」という道徳資料を見ると，異なった状況場面を描いた五つの絵が掲載されている（翻訳筆者）。そこには，一つ目は「ただいま」というタイトルがあって，家に戻ったばかりの子どもが家族とあいさつをしているという場面である。二つ目は「いってらっしゃい」というタイトルで，子どもは出かける前に家族とあいさつをしているという場面である。三つ目は「果物を召しあがってください」とい

うタイトルで，子どもは果物をもって，来客にあげようとしているという場面である。四つ目は「ていねいに電話する」というタイトルで，子どもがマナーよく電話に出ているという場面である。最後のものは，「隣の子どもに会った時，きちんとあいさつする」というタイトルで，子どもが隣に住んでいる友達とあいさつするという場面である。さらに，上述の五つの場面の言葉を覚えさせるために，「礼儀歌」が作られ，五つの絵の下に掲載されている。また，「他にあいさつの言葉を知っていたら，書いてください」という欄があって，それを通して児童が自ら考える機会も設けられている[18]。

以上のことから，日中両国において道徳授業にとって大きな影響を与える道徳資料の特徴について「礼」の視点から比較すると，次のように整理することができる。日本における「礼」に関する道徳資料は，物語を通して，主人公が登場してきて，主人公の気持ちや心情を想像させるようになっている。中国の場合は，「礼」に関する資料はあいさつする時，相応しい行為を具体的な状況場面において単純に示して，指導することになっている。特に，日本の資料が，一つのストーリーとなっているのに対し，中国の資料はいくつもの場面を示して，挨拶の仕方を教え，「礼儀歌」を歌うことで道徳的な行為を定着させようとしたものである。

4．日中における小学校第１学年の道徳資料に関する比較検討

ここでは，日中両国における道徳資料の特質について，とくに両国の共通点と相違点について考察する。

日中両国において「礼」の思想は道徳教育に共通して存在しているが，目標レベルにおいては，日本より中国の方が「礼」という思想が明確に示されている。ところが，「礼」として扱われる内容レベルに目を向けていくと，日本よりも中国の方が「礼」として扱う内容が広範囲にわたっており，「礼」に関する内容を資料として編纂する段階において，一つの資料の中に「礼」にかかわる複数の徳目が組み入れられるために，その資料がいかなる道徳内容を教えるためのものかが不明確になっている。日本の場合は目標レベルにおいて，「礼」という思想が直接的に明示されていないが，道徳の資料を編纂する段階においては，一つの資料に一つの徳目という考え方が強固なまでに踏襲され，それも『学習指導要領』の内容項目との対応関係が明記される形で示されているため，結果として，どのような道徳的価値を扱う資料であるかは，きわめて明確である。

この点に関して，さらに考察していくと，中国の資料がより豊富な内容を一度に扱うことができる要因の一つに，中国のこの段階における資料がほとんど「絵」によって示されているということがあげられる。日本の場合は，第１学年の資料であっても，読みものとしてストーリー性のある簡易な物語が用いられ，そこから教師が想定した一つの価値観を児童が心情的に読み取ることが求められている。ところが，中国の場合は，基本的に絵を眺め，歌を楽しくうたって覚えることが期待されている。活字による情報が得られないため，絵の意味するところや解説などは教師の説話によって自由に補われる。その意味では，日本の場合と異なり，道徳的価値がさまざまな状況の中で多角的･多面的に扱われやすくなっていると言えよう。つまり，日本の場合，目標レベルは抽象的で漠然としているが，内容レベルを経て資料レベルになると，一つの道徳的価値が特定の一つの心情的な見方に集約される傾向にあるのに対して，中国の場合，目標レベルは具体的に整然と示されているものの，内容レベルを経て資料レベルになると，一つの道徳的価値だけに限定するのではなく，他の道徳的価値が生活に即して繁雑に混在されたものになっている。

したがって，中国の道徳資料の特質は，道徳的価値が実生活に即して多角的・多面的に指導しやすいという長所を有しているが，繁雑で表面的な指導に陥りやすい短所を持っているのに対して，日本の道徳資料の特質は，資料レベルでは明確に特定の一つの道徳的価値に対応するようなストーリー性を有したものになっている

ために，教師の指導力が不十分である場合一面的な見方に限定されやすくなってしまうが，道徳的価値を子どもの内面に心情的に深く刻み込み，内面において道徳的実践力を育むような指導が可能になっているところである。この点が，両国の大きな相違点であると言えよう。

このような両国の大きな特質について，まず一部分の道徳的な内容であるが，筆者は，「礼」の視点から小学校第１学年の道徳資料を検討することによって，解明できたと考えている。

５．おわりに

今後の研究課題としては，本稿で得られた知見を踏まえて，分析対象としてより多くの１年生の資料を追加して，研究の信頼性をあげるとともに，さらに，分析対象の学年をあげていくことと，たとえば「孝」などの他の儒教思想の視点からも研究していくことを考えている。

注

（１）那楽「日中韓における道徳資料の比較研究」『筑波大学人間総合科学研究科学校教育学専攻学校教育学研究紀要』第７号，2014年３月．PP.1－20.

（２）http://www.mext.go.jp/component/a－menu/education/detail/（2013.11.28）.

（３）「応試教育」から「素質教育」への転換に際して，『国家基礎教育指導綱要』が2001年に公表された。そこには，小学校第１学年から第２学年では従来の「思想品徳」と「自然」が「品徳と生活」に統合され，第３学年から第６学年では従来の「思想品徳」と「社会科」が「品徳と社会」に統合された。中学校では従来の「思想政治」が「思想品徳」に改称され，高校では従来の「思想政治」が踏襲された。

（４）王凌浩『小学道德课研究』济南出版社，2001年
張德偉『道德教育特质的文化学研究』东北师范大学出版社，1999年。

（５）曹能秀『当代日本中小学道德教育研究』商务印书馆，2007年。
饶从满『现代日本小学校教育』山西教育出版社，1999年。

（６）新渡戸稲造『武士道』岩波書店，1938年，p.11

（７）王麗栄『当代中日道德教育比较研究』广东人民出版社，2007年。

（８）日本の道徳教育の内容項目における「礼」に関しては，柴崎直人が詳細に検討している（「小学校副読本における『礼儀』の扱われ方」『道徳と教育』第330号，2012年，pp.21－31）。

（９）『小学校学習指導要領』文部科学省，2008年，p.13.

（10）同上，p.102.

（11）『小学校学習指導要領解説道徳編』文部科学省，2008年，p.25.

（12）同上，p.6.

（13）基本的な人間関係を規律する五つの徳目は，「父子の親」，「君臣の義」，「夫婦の別」，「長幼の序」，「朋友の信」である。

（14）『小学校学習指導要領』文部科学省，2008年，p.102.

（15）『全日制义务教育品德与生活课程标准（实验稿）』教育部，2011年，p.7.

（16）日本語教育学会編『日本語教育事典』大修館書店，2005年，p.273.

（17）『のびゆくこころ』（１ねん）茨城県版，日本書籍，2007年，pp.36－37.

（18）『品德与生活』1年用书　北京师范大学出版社，2007年，p.47.

参考文献

１．新渡戸稲造著　山本博文訳『武士道 現代語訳』岩波書店，1961年

２．宇野精一『儒教思想』講談社学術文庫，昭和21年

３．王麗栄『当代中日道德教育比较研究』广东人民出版社，2007年

A comparative study on ethical documents for students of grade one in China-Japan primary schools: Centering on "politeness" in Confucianism

Le NA

The key to comparing the characteristics of Chinese and Japanese moral education is to analyze the respective textbooks in detail. As an initial step, this study aims to analyze textbooks used by Grade 1 students in primary school from the perspective of "Politeness". We mainly focus on three parts: objectives, content and textbooks from the Confucian point of view. Through careful collection and analysis, we can draw the following conclusions:

First, regarding the objectives, Chinese textbooks tend to state the moral values comprehensively and explicitly, but there are still some shortcomings.

Next, we examined content. In China, the scale of information found in textbooks is large but very superficial. Comparatively, the Japanese textbooks elaborate just one moral value in each module. Although the information is limited, the moral values can be analyzed deeply and then internalized.

Lastly, we researched textbooks and found the textbooks based on a curriculum of moral teachings contain not only instruction on "politeness" but also teach complex moral values, however these textbooks tend to seek an immediate effect on moral education.